



〈2025年3月29日開催 図書室のつどい 参加者の感想〉

つきなが

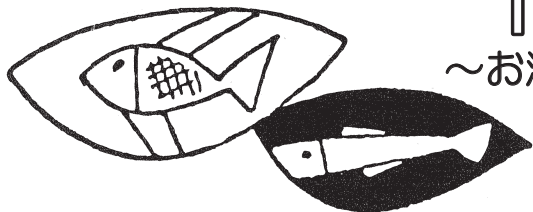
月永理絵 著

『酔わせる映画』

～お酒と食から映画を読み解く～

に参加して

鳥居 正彦



あなたは、映画を観る時、何に注目して観ていますか？俳優？ストーリー？音楽？

月永理絵さんは年間400から500本の映画を観る映画ライター。表題作には新旧国内外の作品200本が登場するが、その1本1本のコラムに月永さんの映画愛があふれている(ちなみに『酔わせる』とはうっとり魅せられることだという)。

月永さんは、自分の記憶から消えてくならない映画の欠片(アイテム)から映画を丁寧に読み解き、そこから自分だけのもうひとつの映画(物語)をつくりだしていく。今回の講座では、世界各国のさまざまな映画について、DVDの上映もはさみながら、次の3つのテーマから読み解いていただいた。

1 映画に登場する

さまざまな「酒」。

お酒を飲む動作(リズム)、仲間と交わす会話、お酒をつぐ音、お酒の色にも注目。その上で、いろいろな種類のお酒がもたらすイメージを、映画のカテゴリー別に、具体的に紹介された。西部劇の(のどを潤す)ビールと(酔っぱらい

たい)ウイスキー。ギャング映画の(大事な話をする時の)ウイスキー、ブランドー。サスペンス・ミステリーの(血の色をイメージさせる)赤ワインなど。任侠映画では義理と人情をかきたてる日本酒が主役だが、実録路線『仁義なき戦い』が主流になると、ビール、ウイスキーが増えていく。

それは旧来の義理と人情が失われていく時代の変化を表しているのだ。『リオ・ブラボー』では、西部劇におけるビールのものいろいろなイメージを観ることができた。また、『お茶漬けの味』では、女たちが自由に酒を酌み交わすことができなかった時代背景の下、女性と酒の関係が描かれていた。

2 「りんご」をテーマに

映画を読み解く。

月永さんは青森県出身で、りんごが登場する映画に対して愛着が深い。りんごは「禁断の果実」のイメージがあるが、古くから象徴的に扱われてきた。誘惑のアイテムとして多くの恋愛映画に登場する一方で、その色彩、形状、咀嚼音に注目すると「悪」との関係性も見えてくる。子どもとりんごの関係も重要だ。『ミツバチのささ

やき』のアナの純真無垢なイメージが印象深い。りんごが表象するイメージは、意味が深く、豊かな世界だ。

3 映画の中の「食」は

どのように描かれてきたか。

誰がどこで何をどのように食べるか。家族で囲む食卓を映す場合も、配置や食べるものによって見え方が全く変わるといえる。食べる際の仕草、会話、食事の形状などによって、その関係性が見えてくるといことだろう『家族ゲーム』では、家族が横一列に並んで食べる食卓の風景が不穏な空気を生み出していた。『岸辺の旅』では、生と死の境界線を漂いつづける夫と妻を結びつける味が白玉団子で表されている。夫に対する妻の愛情が心に沁みるシーンだ。

今回、月永さんのお話を伺い、映画の楽しみ方の新たなヒントをいただいた。映画を1つのアイテムに注目して観ることで、自由にイメージが膨らみ、作品に潜むメッセージが見えてくる……。これからも、いち映画ファンとして、「酔わせる」映画に出会えることを願っている。(春陽堂書店)

ブッククラブから

日常を記憶するいじり

―乗代雄介著『旅する練習』を読んで

城内 亜紀子

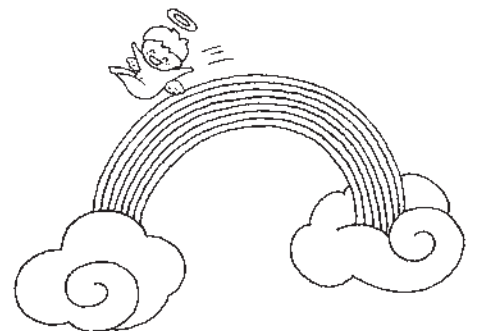
緊急事態宣言発令前の2020年3月のことをどのように覚えていたのだろうか。新型コロナウイルスの感染拡大を防ぐため休校となった小六の亜美と、小説家でその叔父の「私」が、我孫子から鹿島までを徒歩で旅する物語。道中、亜美は大好きなサッカーを、「私」は風景の書写を練習する。

私の疑問の1つは、「練習する旅」がなぜ『旅する練習』というタイトルになったかであった。本書は地の文に3月9日から14日までの主として「私」の手記が引用される形で構成され、さながら旅の実況である。しかし所々に出現する過去形や「紙碑」などの語に違和感を覚えつつ迎えた唐突なラストで、読み違えていたことに気づいた。それを確かめるため始めから読み直すと一転、旅の約2ヶ月後、自身の手記と姪の日記をもとに同じ行程をたどり直した、「私」の二度目の

旅の記録であり再編集された手記である一面が見えてきた。この点を講義では、大野先生が、文中の「今」が指す時間に着目して解説してくださった。再読が奇しくも「私」の二度の旅と重なり、この小説の深さが増した。

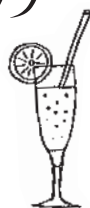
文中にはこの地に縁のある柳田國男の言葉が多く引用されている。「人は歴史歴史としきりに書いたものばかり捜しまわが、それはたいていずっと後にできたものであるのみならず、記録にはたつたこれくらいの事でも、その昔の常人の感覚を、書いて残しているものはないのである。『旅する練習』の初出は文芸誌「群像」2020年12月号で、コロナ禍の進行とほぼ同期して書かれた。行事の自粛が始まり、しかしまだ比較的に樂觀的で、世界が一変する画期となるなど予想もしていなかった頃、普通の人々は、卒業式や小学生最後の試合が中止となつてつまらないながらも休校を喜び、物語の中で亜美は旅で向上したテクニクに自信を強めてサッカー選手への夢を膨らませた。また、旅先で出会う「みどり」という若い女性は、入社式も研修も未定になり将来を悲観したが、内定辞退に応じ憧れの地で新たに仕事を探すことを決意した。結局サッカー選手にはなれなかったし、就職先が見つかったか定かでないが、希望を抱き実現を祈った人や時間が存在した。

白樺派の人々が集った手賀沼、キジやカワウなどの鳥、なんじゃもんじゃの木、馬頭観音。未知のウイルスに対する不安や憶測を煽る当時の報道とは対照的に、土地土地に悠然と存在するいつもの光景が鮮やかに描写される。そこに腰を下ろし、かつて同じく足を止めた市井の人々に思いを馳せ、交わした会話や表情、しぐさを、その地の新たな記憶として積み重ねる。この小説は、後の歴史にはきつと残らない、記したとてそのうち灰になるだろう、それまでと地続きの日常が、その時そこに確かにあり、空白でも無でもなかったことを一瞬でも留めようとする試みである。



くにたちブッククラブ

公民館では、毎年様々な日本文学作品について共同で読む「くにたちブッククラブ」という講座を実施しています。毎回参加者に感想を書いていただいています。



▲講座詳細

次回のブッククラブは9月11日(木)

織田作之助『夫婦善哉』

(決定版)(新潮文庫)です。

(講談社文庫)

新着図書から

〈総記〉

私的な書店

チョン・ジヘ (葉々社)

024

〈哲学 心理学 宗教〉

地図とデータで見る宗教の世界ハンドブック

フランク・テタール (原書房)

160

〈歴史〉

地図なき山

角幡唯介 (新潮社)

291

〈社会科学〉

君はなぜ北極を歩かないのか 荻田泰永 (産業編集センター)

297

「ふつう」の私たちが、誰かの人権を奪うとき

チェ・ウンスク (平凡社)

316

イスラエルとパレスチナ トマ・スネガロフ (かんき出版)

将基面貴巳 (岩波書店)

319

反逆罪

木戸功編著 (青弓社)

326

日本の家族のすがた

竹端寛 (現代書館)

361

あなたとわたしのフィールドワーク

チェ・テソプ (みすず書房)

361

韓国、男子

吉見俊哉 (集英社)

361

東京裏返し 都心・再開発編

熊谷徹 (ばる出版)

366

GDPで日本を超えた! のんびり稼ぐドイツ人の幸せな働き方

森田繁子と腹八分

366

ルポ子どもへの性暴力 朝日新聞取材班 (朝日新聞出版)

ナチュラルボーンチキン 金原ひとみ (河出書房新社)

91か

苦情はいつも聴かれない サラ・アーメッド (筑摩書房)

ひまわり

91し

老いを読む老いを書く

酒井順子 (講談社)

367ア

母親になって後悔してる、といえたら

高橋歩唯 (新潮社)

367た

あの世でも仲良う暮らそうや

信友直子 (文藝春秋)

367の

「ふつう」のLGBT 像に抗して

森山至貴 (青土社)

367も

性暴力の加害者となった君よ、すぐに許されると思うなかれ

赤毛のアン論

368

性暴力の加害者となった君よ、すぐに許されると思うなかれ

赤毛のアン論

368

性暴力の加害者となった君よ、すぐに許されると思うなかれ

赤毛のアン論

368

性暴力の加害者となった君よ、すぐに許されると思うなかれ

赤毛のアン論

368

性暴力の加害者となった君よ、すぐに許されると思うなかれ

赤毛のアン論

368

障害のある人の親がもの言うということ

今さら聞けない防災の超基本 永田宏和監修 (朝日新聞出版)

369

当事者主権

中西正司 (岩波書店)

369

能登半島記 (未完)

前口憲幸 (時事通信出版局)

369

教員不足

佐久間亜紀 (岩波書店)

374

ルポ学校がつまらない

小林美希 (岩波書店)

376

旅人の食

山本志乃 (教育評論社)

384

〈自然科学〉

多摩・武蔵野スリパチ散歩

真貝康之 (実業之日本社)

454

ニューヨーク精神科医の人間図書館

ナジョンホ (柏書房)

493

クマはなぜ人里に出てきたのか

永幡嘉之 (旬報社)

489

風呂と愛国

川端美季 (NHK出版)

498

〈産業〉

牛乳から世界がかわる

小林国之 (農山漁村文化協会)

641

海と生きる

唐澤和也 (集英社)

661

〈文学〉

(在日) という根拠

竹田青嗣 (創元社)

910

あした死ぬとしたら

寺山修司 (興陽館)

910

ヒロシマ遡上の旅

川越厚 (本の泉社)

91か

森田繁子と腹八分

河崎秋子 (徳間書店)

91か

ナチュラルボーンチキン

新川帆立 (幻冬舎)

91し

ひまわり

瀬尾まいこ (水鈴社)

91せ

そんなときは書店にどうぞ

羽馬千恵 (花伝社)

91は

心の傷と、ともに生きていく

堀川恵子 (講談社)

91ほ

透析を止めた日

横尾忠則 (実業之日本社)

91よ

飽きる美学

若竹千佐子 (河出書房新社)

91わ

台所で考えた

イム・ソヌ (東京創元社)

92イ

光っていません

松本侑子 (文藝春秋)

93ま

赤毛のアン論

赤毛のアン論

93ま

いまこそ、考えたい戦争と平和
シリーズ〈戦後80年〉詳細は公民館だより
7、8月号をご覧ください。

- 8月8日 (金) 夜7時～9時…………… ナチス・ドイツー歴史学からの検証
 8月9日 (土) 昼1時半～4時半…………… 台湾生まれの日本人「湾生(わんせい)」の軌跡
 8月16日 (土) 朝10時～12時…………… 国立市ゆかりの画家 平松輝子・二紀和太留が込めた平和への想い
 8月24日 (日) 昼2時～…………… CINEVOX 公民館映画会『父と暮せば』
 9月13日、27日、10月11日すべて(土) 朝10時～12時…………… くにたち・多摩地域の戦争 (全3回)

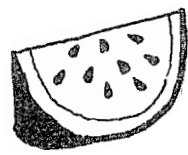
講座参考図書

- *検証 ナチスは「良いこと」もしたのか?…………… 小野寺拓也、田野大輔 (岩波書店)
 *父と暮せば…………… 井上ひさし (新潮社)
 *私たちと戦後責任 日本の歴史認識を問う…………… 宇田川幸大 (岩波書店)
 *歴史的に考えること 過去と対話し、未来をつくる…………… 宇田川幸大 (岩波書店)
 *多摩の戦争遺跡…………… 増田康雄写真・文 (新日本出版社)

図書室のついで

『対岸の家事』

お話 朱野 帰子 (小説家)



「家事」で孤独やモヤモヤを感じたことはありませんか？

『対岸の家事』は、専業主婦の主人公が、ワーキングマザーや育休パパ等、自分とは異なる考え方を持つ「対岸にいる人達」との交流を通し、それぞれが家事という「終わりなき仕事」に奮闘する姿を描いた物語。2025年4月にドラマ化され、多くの人の共感と呼んだ作品です。作者の朱野さんは、徹底した取材から「働くとは何か」を描く「労働小説」の書き手。朱野さんの後輩が、「家事は仕事じゃない」と言われたことがきっかけでこの作品が生まれました。

家事は、誰にでもできる簡単な仕事なのでしょうか？ 今回のついでで、朱野さんに作品へ込めた想い等を伺いながら、生きていく以上誰かがやらなくてはならない「家事」について改めて考えて共有し合うことで、それぞれの日々が少しだけ前向きになるはず！

〈朱野さんの本〉表題作 (講談社文庫)、『わたし、定時で帰ります。』(新潮文庫)、『海に降る』(幻冬舎文庫) ほか

とき 9月7日(日) 朝10時〜12時

ところ 公民館 地下ホール

定員 70名(申込先着順)

申込先 8月14日(木)朝9時〜

電話またはホームページより申込

公民館 ☎042(572)5141



〈私の本棚から 第5回〉

斎藤真理子 著

『韓国文学の

中心にあるもの』



田久保薫子

8月、夏も本番を迎えました。涼をとりながら過ごすには読書は最適かもしれません。この夏、海外文学に触れてみるのはいかがでしょう。か。お隣の国、韓国文学に関する本を紹介します。

斎藤真理子さんの『韓国文学の中心にあるもの』です。韓国の作家ハン・ガンさんのノーベル文学賞受賞は記憶に新しいかと思えます。彼女の作品も数多く翻訳し、日本で韓国文学を広めた立役者とも言われる斎藤さん。本書では『82年生まれ、キム・ジョン』を起点にセウオル号沈没事故などの韓国の現代から朝鮮戦争や済州島四・三事件といった近代史を文学と絡めて読み解きます。

韓国文学が「なぜこんなにも面白く、パワフルで魅力的なのか。その謎を解くキーは「戦争」にある。」と著者。2010年代後半から植民地支配が終わる1945年へ遡る構成により、各時代を描いた文学作品をその時代の歴史とともに解説します。巻末には韓国と日本それぞれの「近現代史・関連年表」と取り上げた文学作品・参考文献リストも掲載されており、気になる点をより深く知ることも可能です。韓国文学を通じ「似ていて、違う」と言われる隣国を知る充実の一冊となっています。

います。

こちらの本から影響を受け、今年1月に新しい書籍が出版されました。赤松美和子さんの『台湾文学の中心にあるもの』です。赤松さんは「斎藤真理子『韓国文学の中心にあるもの』が外国文学研究者に、自身の研究対象の文学の中心にあるものが何かという問いを突き付けた」と言います。本書では政治、そして多様性がその答えであるとし、台湾では文学が現実にと人と社会を動かし続けていることが述べられています。同性婚法制化や女性国会議員が40%以上を占める国として知られる台湾も日本同様に人々が政治に翻弄されていたことを文学が示します。同時に人々が格闘し、社会に介入していった結果が今日に至るとの認識も深められ、こちらも隣国の姿に触れるのに有益な一冊です。

斎藤さんは「海外文学には、それが書かれた地域の人々の思いの蓄積が表れている。隣国でもある韓国の文学は日本に生きる私たちを最も近くから励まし、また省みさせてくれる存在だ。韓国文学を1つの有用な視点として、自分の生きている世界を俯瞰し、社会や歴史について考える助けにしてみたらありがたい。」とも述べています。海外文学を通じて、自分の置かれた環境に思いを巡らせる。これもまた読書の一興ではないでしょうか。

『韓国文学の中心にあるもの』(イースト・プレス)
『台湾文学の中心にあるもの』(イースト・プレス)